

戸川猪佐武

小説吉田学校

第四部 金脈政変

小説吉田学校（第4部）金脈政変

昭和50年6月30日 初版発行

著者 戸川猪佐武

発行者 倉林公夫

発行所（株）流動 東京都港区芝愛宕町1-3（第9森ビル）

電話／03-433-7461代 振替東京 107534 ㊤ 105

印刷／新日本印刷（株） 製本／徳住製本（株）

〈検印省略〉

0093-0016-8942

万一、落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

戸川猪佐武

第四部 金脈政變

小説吉田学校



小說吉田学校

第四部
金脈政変

／ 目次

熱い夏——徳島代理戦争——7

無器用な男——党人三木の執念——34

吳越同舟——福田派燃える——51

七夕選挙の終末——田中内閣揺らぐ——81

南平台の夜——三福提携成る——94

長い六日間——謀將保利の登場——120

秋風荒ぶ——文春騒動——164

孤独の決意——総理外遊——194

盟友の賭け——大平陣を布く——216

消えた“椎名”名簿——内閣改造——235

少壮のひと——中曾根の影動く——251

二つの方程式——田中退陣——271

五十一対四十九——椎名裁定下る——309

あとがき——345

装
幀
村
上
豊

さ
し
え
鴉
田
幹

熱い夏

あとになって考えれば——だれにも予知はできなかったが、そのときすでに、政局は異変を前触れていた。四十九年（一九七四）六月上旬の徳島市でのことであった。

この時期の数日間を、田中内閣の副総理・環境庁長官三木武夫は、ここに滞在していた。そのこと自体が、異常なことであった。総選挙のときでさえ、三木は自派候補の応援に全国を飛び歩いて、自分の選挙運動のために、選挙区の徳島に戻ってくるのは、終盤戦に入ってから、せいぜい二日ほどでしかない。

実力者と呼ばれる人びとは、約二十日間の運動期間中のほとんどを、自分の派閥の候補応援に使いやすのが慣例になっている。田中角栄などは、ただの一日も、選挙区の新潟県に帰ることはない。

まして今は——総選挙の期間でもなければ、それが近いわけでもない。そうした平時に、三木の長期にわたる徳島滞在は、たしかに異常であった。

こんどの場合、三木は中近東諸国をまわってきた帰朝報告演説会を、徳島市を中心に県下主要都市で、打って歩いていた。といっても、

——帰朝報告演説が、三木の真の滞在目的ではない。

ということ、子供でもない限り、ほとんどの県民は心得ていた。

本当の三木の目的は、この一週間、まるで形と影といった恰好で、三木に同行している久次米健太郎参議院議員——その選挙応援であった。参院選の公示は六月十六日、もう間もないのだ。

どこの会場でも、三木の演説の前座という形で、壇上に立つ久次米は、生真面目そうな面のひたいに、汗を滲ませながら、こう挨拶していた。

「……私のために、三木副総理は、重要、貴重な時間を割いて、かくも熱烈に、私をご支援して下さっております。私としては、なにがあらうと、闘い抜いて、勝たなければならないのであります……」

久次米は、前歴は徳島県会議員、また現役の参議院議員である。その政治生活は一貫して、三木直系であった。

といっても、ただそれだけの因縁、理由だけで、三木が異例の行動を、敢えてしているわけではなかった。こんどの参院選——徳島県地方区の選挙戦には、田中角栄派の後藤田正晴が自民党の

公認として立候補する予定で、すでに、迫力ある選挙運動を展開していた。久次米は、非公認——無所属という不利な立場に追いやられている。

久次米、後藤田の議席争奪は、三木派と田中派との戦争——三角代理戦争といわれるまでに激烈になりつつあった。このことが、三木の心理と足とを、一週間も徳島に、釘づけにしているのだった。

少くとも、この四十九年七月の参議院選挙の一年前では、徳島県地方区（定員一名）は、自民党の現役議員久次米健太郎が、なんの問題もなく公認されるものとみられていた。

自民党の久次米に対して、社会党、公明党、また共産党が、候補を立てるとしても——徳島は保守勢力の強いところである。ことに三木王国といわれる地方であった。久次米の勝利は、眼に見えていた。三木は、よくその演説のなかで、

「議会生活三十年。その三木を見くびっては困る……」と演説した。佐藤栄作と、過去において総裁公選を争ったときにも、この議会生活三十年という演説をくり返した。三木は、演説に調子が出てくると、聴衆の側からは見えないが、演壇のうしろで、片方の靴を脱ぎ、足で拍子をとる奇妙な癖があった。演壇の横手に坐っている人びとは、その三木の足の癖が始まると、

——三木先生は、演説に乗ってきた。

と、わかるのであった。三木は、昭和十一年はじめて出馬し、当選して以来、一貫してこの郷里徳島を選挙区としてきた。大物になるにつれて、三木の徳島県における勢力は拡大され、「徳

島県は三木王国」といわれるに至った。

その三木直系で、城代家老的な存在が久次米であった。この久次米に挑戦するものとして突然、登場してきたのが後藤田正晴であった。

連合赤軍の浅間山荘事件があったときの警察庁長官である。警察官僚のトップに位する人物で、彼を高く評価したのが田中角栄首相であった。田中は、後藤田を二階堂進官房長官の下副長官に起用した。後藤田は田中、二階堂、あるいは幹事長の橋本登美三郎に、「政界に進出したい」と、その希望を申し入れた。だれも異存はなかった。

後藤田としては、四十七年（一九七二）十二月の衆議院総選挙に打って出たい意志があったが、副長官に就任して間もないところで、選挙準備が整わなかった。それを見送って、この四十九年の参議院選挙に出馬する決意を固めたのである。田中、二階堂たちは、

「参議院に出るならば、全国区がよからう。警察庁長官として、名も売れているし、また警察関係の支持者も多いことだ。当選は間違いあるまい」とすすめた。だが後藤田は、

「いや、どうあっても徳島県地方区で出たい」と、譲らなかつた。徳島は後藤田の郷里である。それなりに地盤もある。しかも後日、彼は徳島県から衆議院に出馬したい希望を持っていた。そのためには、全国区よりも徳島地方区がよいというわけであった。

後藤田は徳島県の政界に働きかけて、出馬の準備を始めた。

徳島にも、衆議院副議長をつとめている秋田大助、あるいは参議院議員の小笠公昭をはじめ、自民党内部の三木批判勢力、三木反対勢力が存在していた。これらの人びとが後藤田擁立へと動いたのである。

ことに田中首相のバックアップがあつてみれば、後藤田の勢力の伸びは早かった。四十八年、後藤田が、自民党県連に公認申請をしたことから、ことは、複雑になった。

公認は現役の久次米か、新人の後藤田か——県連における三木派勢力と、反三木派勢力の話し合いがつかないままに、県会議員を中心とする県連首脳の投票によって決めることになった。たしかに投票はおこなわれた。しかし、その開票に「待った」をかけたのは、三木派の県議たちであつた。

「ここで開票はすべきではない。最終的な採決は自民党本部に任せるべきである」というのだつた。

三木勢力がそのような発言をした裏には、二つの事情があつた。

——投票の結果は、はじめから久次米の負け、後藤田の勝ちとわかつてゐる。ここで開票をし、公認は後藤田ということになってはまずい。

——投票をこのまま凍結して、自民党本部に持ち込めば、三木副総理と田中首相との折衝で、何とか久次米に公認が決まるのではないか。

と、いうことであつた。

後藤田支持勢力は、開票結果に自信があった。

「よろしい。投票箱を、このまま自民党本部に送り、採決を一任しよう」

それは、ある計算があったからである。

——ここで開票をして、後藤田公認に決まれば、三木派の連中は自民党を二つに割っても、久次米を擁立するだろう。かえってまずい結果になる。むしろこの場合は、三木派の主張を聞いて、党に委ねた方がよい。党では田中首相が三木副総理を抑え、後藤田公認に決してくれるに違いない。そうなれば三木派も、後藤田公認をのんで選挙に協力するだろう。

というのが、その読みであった。こうして珍妙にも、投票箱はそのまま車で徳島空港に送られ、そこから飛行機で羽田空港へ、そして平河町の自民党本部へと持ち込まれた。

投票箱が届けられたとき、橋本幹事長は事務局員に、

「投票箱は密封したまま、金庫にしまっておけ」と命じた。橋本としては、

——この投票箱を、今すぐ開票して、後藤田の勝利を明らかにし、公認を決定しては、徳島の三木派を刺激して面白くない結果になる。さらに時間をかけて検討するという形で、三木派を納得させるのが良策だ。

と、考えたからであった。徳島県の参議院候補の公認問題は、そのまま凍結された恰好になった。

だが、参議院選挙の公示六月十六日が近づくとつれ、田中と橋本はこの問題の決断を迫られる

ことになった。

不幸なことに久次米という議員は、党内における知名度が低かった。人間は真面目であるとしても、活動は人の目を惹くまでに至らない存在であった。これに比べて後藤田は、警察庁長官としても、また官房副長官としても、その活動は目立つものがあつた。田中総裁は、

「公認は後藤田君にしよう……」と決断した。久次米は、現役でありながら、そしていたいの場合、現役優先のルールが、尊重されるにもかかわらず、非公認にされてしまったのである。

2

それまでに、三木も当然、田中に対し、

「なんとか久次米君の公認を考慮してもらいたい」という申し入れはおこなっていた。そのたびに田中は、硬い表情でうなずきだけであつた。年齢にしても政界のキャリアにしても、三木よりはるかに下の田中だが、三木はその田中首相のもとでの副総理・環境庁長官である。徳島県だけの参議院候補の問題で、執拗に食い下がるわけにはいかなかった。そのことがあるいは田中の胸のなかに、

——三木君も、そうそうは久次米公認には執着はしまい。

という判断を起させたふしもあつた。ある意味では、田中は軽く考えたのだ。だが後藤田公認

が決まったとき、三木の内側には沸騰するものがあった。

——自分は田中君に嘗められたということか。

さすがに三木は、正面切ってその憤怒を激発させるようなことはしなかった。

——むしろ時間をかけて久次米を支援し、久次米を選挙に勝たせることだ。それによって田中を反省させる。

いかにも三木らしい結論で、みずからを納得させた。それにしても、三木をとり囲む人びとは収まらなかった。古くから三木の周辺にいる井出一太郎にしても、松浦周太郎、あるいは河本敏夫、赤沢正道たちにしてもそうであった。

だいたい三木派は三木に似て、大部分の首脳たちがおだやかな政策型である。この種の闘争には不得手の人びとが多かった。それが三木派を田中派や福田派、あるいは大平派のような大派閥に発展させない大きな理由であった。と同時に、三木が総裁公選に打って出ても、大量の票を得られない原因ともなっていた。だが久次米問題は、中堅や若手の一部をいたく激昂させた。田中政権がスタートして以来、複雑に蓄積していたものをも爆発させたのである。

ここで四十七年（一九七二）七月の総裁公選の経緯を、回顧してみなければならぬ。その公選は、三角大福の勝負と称された。三木武夫、田中角栄、大平正芳、福田赳夫の闘いであった。

予想では三木は田中、福田に次ぎ、そして大平を越えて第三位、百票近い票数を獲得するであろうと予想されていた。開票の結果、三木はわずかに五十数票、三位の大平に大きく水をあけら

れた。予想外の結果に、会場にいた三木の面は蒼白いものへと変った。かたわらにいた海部俊樹は、思わざる惨敗に、おいおいと声をあげて泣いた。

決戦投票に臨んでは——すでに、三木と田中とは協定を取り交していた。田中が同じ党人であるという名分、また田中が三木の念願である日中国交正常化をなし遂げる約束のもとに、三木派は田中に票を投ずるという協定であった。

決戦投票は、田中二八〇票、福田一九〇票で、田中の勝利に帰した。この経緯から、田中主流派体制は、田中、大平、三木、中曽根康弘の四派連合で形成されることになった。

田中政権のもとで、三木とその派の多くは、

——日中国交正常化を担うために外相を。

という期待があった。だが、最低の四位であってみれば、外相要求はむずかしかった。田中としても、

——日中を主軸にした外交は、年来の盟友である大平に任せたい。

という気持であった。三木に対しては、

——年配、閥歴からいって、大先輩にあたる。副総理として遇することが至当……

と考えるのだ。党をあずかる副総裁には、田中は椎名悦三郎を充てた。

三木副総理という処遇については、三木派内部は、むしろ喜びの声をあげた。だが、三木をふくめて閣僚ポストは二つ——ということに、不満があった。その四十七年（一九七二）十二月総